

「まちの顔」が消えてしまう

近年、県内の多くのまちで、商業を取り巻く環境の変化や中心部の人口の減少などを背景に、

中心市街地の空洞化が深刻化しています。

このままでは、近い将来多くのまちから

そのまちの「顔」と呼べるような場所が消えてしまい、長い歴史の中で育んできた固有の伝統や文化が失われてしまうかもしれません。

本当にそれでいいのでしょうか。

今回は、まちづくりについて改めて考えてみたいと思います。



AIZUWAKAMATSU

IWAKI



FUKUSHIMA



NOTTINGHAM

元気なまちを取り戻す

中心市街地の再生に向けて――

衰退する中心市街地

中心市街地は古くから商業や教育、医療などさまざまな機能が集まり、農村社会を含む広域的な生活圏の中心として、地域経済の発展や豊かな生活の実現に大切な役割を果たしてきました。しかし、車社会の急速な進展や地価の高騰などを背景にした住居の郊外への移転、核となっていた大型店の相次ぐ撤退などにより、空洞化が進行しています。

郊外の大型店があれば大丈夫？

「郊外に便利な大型店があるから、中心市街地がなくなっても構わない」という意見もありますが、本当に問題はなのではないでしょうか。

郊外店ばかりになると、車を利用できる人には便利ですが、移動手段のない子どもや高齢者、障がい者の皆さんは、逆に不便な生活を強いられます。さらに、人が住み、暮らし、活動する要の場としての中心市街地の衰退が進めば、人と

人とのつながりが薄れ、地域コミュニティそのものがなくなる恐れがあります。これらは、まち全体の活力や魅力を失うだけでなく、その地域固有の伝統や文化といった大切な財産までも失うことを意味するのです。

まちづくりの主体は

私たちが豊かで快適な暮らしを営むためには、その生活の拠点となるにぎわいと魅力あふれるまちが必要です。そして、中心市街地の再生を含めたまちづくりは、行政の取り組みだけでできるものではありません。そこに住む人たちやそこで事業を営む人たちが、そこを利用する人たち自らが、その地域に愛着や誇りを持ち、その地域をより快適で魅力あるものにしよと考える、主体的に取り組むことが欠かせないのです。県内でも、住民の皆さんが主体となり、その地域の個性を生かしにぎわいを取り戻そうと取り組んでいるところがあります。そんな皆さんをご紹介します。